

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2009～2013

課題番号：21242023

研究課題名(和文) 東アジア木簡学の確立

研究課題名(英文) Construction the study of Woodern Documents in Eastern Asia

研究代表者

角谷 常子 (SUMIYA, Tsuneko)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：00280032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 30,900,000円、(間接経費) 9,270,000円

研究成果の概要(和文)：成果としてまず挙げられるのは、直接的類似点のないものと比較研究する新たな視点・視覚を提示したことである。具体的には口頭伝達、視覚機能、書写文化、文書作成の厳格さなどである。これらの点について、自国に「ない」理由を問うことによって、これまで注意されなかった問題が浮き彫りになり、そこからより本質的な特徴が見えてくることを示した。もう一つは中国簡牘研究者が日本・韓国木簡へ、日本・韓国木簡研究者が中国簡牘へ、注意を向ける第一歩を踏み出したことである。日本・韓国木簡と中国簡牘は、その使用年代が大きく隔たるため類似点が乏しく、研究者の関心も低かったが、時代的懸隔は乗り越えられることを示した。

研究成果の概要(英文)：In the present study, we presented a new perspective for comparative study of wooden documents which have no common characteristics. This perspective includes, among others, analyzing the documents from the point of views from oral tradition, visual function, literary culture, and recording strictness. By investigating why a given society lacks a certain aspect related to the areas included in this perspective, we can discover other new unnoticed issues, and consequently, the most fundamental characteristics of that society. This is only one step to attract the attention of researcher of Chinese wooden documents to the study of Japanese and Korean wooden documents, and vice versa. Since Japanese and Korean wooden documents have almost no common characteristics, there were almost no comparative studies. However, as shown by the present study, it is possible to overcome the time barrier.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：木簡 東アジア 紙木併用 簡牘

1. 研究開始当初の背景

中国では戦国から魏晋に至る数十万に上る簡牘が出土している。即ち簡牘だけを用いたいわば簡牘時代から紙木併用期の簡牘まで存在する。即ち中国は簡牘 紙木併用 紙という変化を経験し、かつその資料を保有しているのである。また韓国は現時点では6～7世紀の木簡が中心で、その数は日本・中国とは3ケタ違う。さらに日本では7～8世紀の木簡が40万弱出土している。このように日本と韓国の木簡は使用年代が近いが、中国簡牘と日本・韓国木簡は大きく開いている。それゆえ日本と韓国では木簡の形状や機能などの点で類似点が多く、比較研究が盛んであるのに対して、中国簡牘に対する関心は薄い。しかし上述のように、中国は簡牘から紙の時代までの変化を辿れる唯一の国である。また日中韓は木簡と文書行政という共通項をもっている。従ってこうした点を活かして各国の特質に迫ることができるのではないかと考えた。しかしその前にやらねばならないことがある。それは、中国簡牘のように類似点の乏しいものをも含めて議論ができる土台を構築するために、新たな視点・視覚を見出し、東アジア木簡学をつくることである。かくてこの問題を研究課題としたのである。

2. 研究の目的

以上のような状況と問題意識を踏まえて、「各国の木簡学」ではなく「東アジアの木簡学」の構築を目標とした。そのためには、まず木から紙への変化を辿れる中国簡牘について、近年発表された秦簡や晋簡をも使って、簡牘時代の簡牘使用原理、紙木の使い分け、そして紙への移行のプロセスを描くことが必要である。その際、これまでは辺境出土簡を中心に議論されてきたが、新出資料を取り込んだ考察が必要である。さらに手薄な唐以降の紙の時代の考察も取り組むべき課題である。また出土例の豊富な日本においては、正倉院文書や文献史料をも合わせて、紙木併用のあり方を明らかにしなければならない。韓国木簡は出土点数が少ないため、体系的な議論になりにくいだが、中国と日本をつなぐ重要な位置を占めるため、そうした観点から東アジア木簡学構築のための視点を提示することをめざした。

3. 研究の方法

研究方法は研究会活動と現地調査の大きく2つに分けられる。まず研究会活動であるが、全員が集まって年2～3回開かれる全体研究会と、適宜開かれる小規模な研究会がある。これらは基本的にはメンバーが研究発表し議論するという形式で、その目的は最初の1～2年は、相互理解を深めることであった。そのため、日中韓の研究者が通行行政、複数の機能をもつ木簡など、同じテーマで発表し、何が違いなぜ違うのかを議論した。しだいに

相互理解が深まり、共通認識が形成されてくると、新たな視覚を求めての研究発表へと移っていった。一方、小規模研究会で取り上げられるテーマは、資料そのものに即した、より具体的な内容のものが多く、実際の資料を見ながら文字の書きぶりや木材の使いかた、形態上の特徴とその意味などが取り上げられた。またこうした研究会には関連分野の専門家や異なる時代の研究者を招いて、多角的な視野と知識の拡大に努めた。具体的には正倉院文書、殷代甲骨占いの記録、清朝の公文書、里耶秦簡の出土地と秦簡の特徴、といったテーマについて講演を聞き、意見交換を行った。

次に現地調査について述べる。調査地は国内では新潟、秋田、福岡、大分、国外では韓国(羅州・昌原・慶州・大邱・ソウル)、中国(湖南省)、スウェーデンであった。個別の詳述はさけるが、目的は各地の博物館や研究所が所蔵する木簡や紙文書さらに貴重な帛書の実物及び出土状況を調査することである。具体的には、資料を手にとり、写真では見えない側面や裏側の状態を見たり、写真では判別できない影や傷様のものを確認した。また可能な限りそれらが出土した現場を見学し、不可能な場合は発掘担当者から詳しい話を聞くこととした。このような活動や現地の研究者との意見交換を通して、相互に学术交流を深めたが、こうした学术交流と信頼関係の構築は、今後の研究にとって良い環境を築くために極めて重要な活動であると信じている。

以上のような研究方法に加え、もう一つ重視したのが外部評価である。無意識のうちに我田引水に陥らないために、全く異なる視点からの批判・評価を受ける必要があると考え、敢えて研究期間の中間に、中国においてシンポジウムを開催した。また最終年度の研究成果とりまとめの前に奈良で国際シンポジウムを開催した。

4. 研究成果

(1) 研究の成果とその国内外における位置付け及びインパクト

「各国の木簡学」から脱した「東アジア木簡学」確立のための最重要課題である、新たな視点・視覚の提示。具体的には書写文化、音声言語、視覚機能、文書行政の厳格さ、紙木併用のあり方、国内における木簡使用の差異である。ただ新たな視点といってもこれらは従来から指摘されてきたものがほとんどである。しかしその指摘と考察は自国の木簡について行われ、他国との比較においてその意味を掘り下げるには至らず、また他国の木簡研究者もまた、関係のないこととして自国に存在しない意味を考えるには至っていなかった。つまり、ここにいう新しい視点とは、これまで誰も指摘しなかったという意味ではなく、某国の木簡の特徴がほんとうに自国にないのか、ないならばなぜないのかを問い

直し、それが東アジア全体で議論するに有効な視点となりうるかどうかという観点からとらえ直した、という意味で新しいのである。

文字通り、これまでに指摘のない新しい視点を提示した。1つは文書行政運営の厳格さである。古代中国では厳格な文書行政が行われていたとされるが、何がどのように厳格なのか、なぜ厳格なのか、またそれは紙の出現以後も変わらないのか、変わるとすればその理由は何かといった問題に取り組んだものはほとんどない。中国においてこの点を考察することによって、木から紙への変化の過程の一つのモデルを提示することができると思われるからである。その際木や紙という書写材料がもたらす変化と別の要因による変化は慎重に区別せねばならない。また紙木併用期の日本においては正倉院文書など紙文書を取り込んだ考察が必須となる。今一つは書写文化である。書写用の机を用いず手に持って書く形態や、筆の持ち方、運筆法など、日本・中国・韓国は共通した部分をもつが、そうした書写という一つの運動を新たな比較研究の視点として提示した。究極的に比較すべき対象が、当該地域の社会や人間関係の有様であることを示した。音声言語や視覚効果など具体的な項目を、それら特徴の有無にかかわらず考察することからわかるのは、それらの特徴の有無や有り方が示すのは、当該地域の政治がめざす形、社会、人間関係であるということである。日本・中国・韓国各々が他国の木簡研究に注意を向け、ともに議論をするための第一歩を踏み出したことである。上述のように、木簡研究において、日本・韓国と中国の間には大きな溝がある。それは直接的類似点を持たないがゆえに比較できない、と考えられてきたからである。しかし、既述のような問題意識から、中国でシンポジウムをおこない、また最終年度には最終成果である論文集の中国語版を作成し、関係機関や研究者に送った。中国でのシンポジウムには多くの研究者が集まったが、予想されていたこととはいえ、日本木簡に対する反応は今一つであった。しかし、これまで日本や韓国木簡に対する関心が薄く、まして日本・韓国木簡に関する研究成果をまとまって聞く機会もほとんどなかったことを思えば、致し方ないかもしれない。それでも個別にはさまざまな反応があり、シンポジウム以後交流が続いていることは大きな成果であった。その後最終年度に研究成果をとりまとめた論文集を作成した際、同時に中国語版を作成した。これまで日本の論文集を中国語で発信することはまれであったが、「各国の木簡学」から脱却するためには、中国語での発信が必須のことと考えたからである。これに対して論文集到着直後に各著者のもとにメールなどの形で意見や質問が寄せられたり、ホームページに掲載されたりと驚くほどの速さで反応が見られたことは、いまだ我々の意図が十分に伝わったとは言い難い

ものの、東アジア木簡学に大きく第一歩を踏み出したと確信した。

(2) 今後の展望

今後はさらに韓国・中国との学术交流を深めるが、単なる情報交換ではなく、真に東アジア全体で議論できる方法を追究しなければならない。我々が提示した以外にも多くの論点があるが、そうした視点・論点を積極的に発信することが重要である。また、究極的な比較対象は社会や人間関係だと述べたが、そのためには木簡以外にも研究対象とすべき書写材料がある。それは石刻である。これはきわめて政治性・社会性の強い書写材料であり、しかも中国などとは対照的に日本にはほとんど根付かなかった文化であり、格好の研究対象であると考えられる。今後は古代ギリシャ・ローマなどの石刻文化ともあわせ、グローバルに比較研究をすすめる必要がある。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計19件)

鷹取祐司、漢代の居延・肩水地域における文書伝達、立命館東洋史学、査読無、36巻、2013、1~47

角谷常子、里耶秦簡における単独簡について、奈良史学、査読有、30号、2013、107~130

藤田高夫、東アジア木簡学の視点、東アジア文化交渉研究、査読有、6号、2013、577~585

館野和己、平城京内の固有地名 - その予察的検討 -、古代学5 奈良女子大学古代学学術研究センター、査読有、5巻、2013、14~25

李成市、日本歴史学界の東アジア世界論に対する再検討 - 韓国学会との対話から、歴史学報、査読有、216号、2012、57~80

市大樹、御食国志摩の荷札と大友家持の作歌、万葉集研究、査読無、33集、2012、207~260

李成市、尹龍九、金慶浩、平壤貞柏洞364号墳出土竹簡『論語』、出土文献研究、査読有、10巻、2011、174~206

鷹取祐司、秦漢時代の文書伝達形態 - 里耶秦簡J1(16)5とJ1(16)6を中心に、中国古中世史研究、査読有、24巻、2010、239~274

鷹取祐司、秦漢時代の文書伝送方式 - 以郵行・以県次伝・以亭行、立命館文学、査読有、619、2010、50~73

李成市、古代東アジアにおける木簡文化の変容、東海史学、査読無、45号、2011、3~19

角谷常子、中国古代下達文書の書式、簡帛研究、査読有、2007、2010、165~180

李成市、東アジアにおける高句麗の文明史的位置、史林、査読無、34、2009、353~367

〔学会発表〕(計 34 件)

角谷常子、簡牘における秩序～単独簡を中心、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

関尾史郎、穀物の貸与と還納をめぐる文書行政システム一斑 - 東アジア古文書学の起点としての長沙呉簡、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

畠谷至、文書行政における常套句、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

寺崎保広、考課・選叙の木簡と儀式、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

市大樹、日本古代木簡の視覚機能、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

渡辺晃宏、墨書のある木製品とその機能 - 東アジア木簡学の確立のために -、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

館野和己、荷札木簡に見える地名表記の多様性、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

藤田高夫、六朝期における木簡の存否、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

馬場基、書写技術の伝播と日本文字文化の基層、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

鷹取祐司、漢簡の付札と日本木簡の付札、東アジア木簡学の確立国際シンポジウム、2013年8月31日～9月1日、奈良大学

関尾史郎、木が紙にかわる時 - 古代中国、西北地域の埋葬文書から -、関西大学東西学術研究所「非典籍出土資料研究班」、2013年11月30日、関西大学千里山キャンパス児島惟謙館

市大樹、木簡から見た7世紀後半の東海地方と飛鳥、「古代東海の文字世界」シンポジウム、2014年2月2日、名古屋市立博物館

角谷常子、牘と冊書、中国簡帛国際論壇2012、2012年11月17日～11月19日珞珈山賓館(武漢市)

市大樹、都の中の文字文化、国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「古代日本と古代朝鮮の文字文化交流」、2012年12月15日～12月16日、イイノホール(東京都)

角谷常子、簡牘の形態と精神、東アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討2011年8月29日、北京花園飯店

李成市、東アジアにおける百済木簡、東

アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討、2011年8月30日、北京花園飯店

藤田高夫、大英図書館蔵マザール・トクラク出土木簡からみる紙木併用時代の木簡、東アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討、2011年8月29日、北京花園飯店

関尾史郎、機能からみた長沙呉簡、東アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討、2011年8月29日、北京花園飯店

畠谷至、視覚木簡の研究展望、東アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討、2011年8月30日、北京花園飯店

鷹取祐司、日中文書木簡に見える符について、東アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討、2011年8月29日、北京花園飯店

21 渡辺晃宏、日本の文書木簡の成立と展開、東アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討2011年8月29日、北京花園飯店

22 寺崎保広、紙と木簡の日本における使い分けについて - 考課及び選叙制度を例に東アジア簡牘と社会 - 東アジア簡牘学の検討、2011年8月30日、北京花園飯店

23 鷹取祐司、秦漢時代の文書伝達形態 里耶秦簡 J1(16)5 と J1(16)6 を中心に、中国古中世史学会2010年6月25日、成均館大学校(韓国)

24 渡辺晃宏、日本古代の都城木簡と羅州木簡、国立羅州文化財研究所開所5周年記念国際学術大会「6～7世紀栄山江流域と百済」、2010年10月28日、国立羅州文化財研究所

25 館野和己、日本古代の交通、愛媛大学「資料学」研究会、2009年9月13日、愛媛大学

26 李成市、東アジアにおける木簡文化の伝播と受容、木簡学会、2009年12月6日、奈良県新公会堂能楽ホール

27 李成市、新羅『論語』木簡の用途に関する試論、新羅史学会第88次学術発表会、2009年12月19日、西江大学(ソウル)

〔図書〕(計 21 件)

角谷常子・畠谷至・鷹取祐司・関尾史郎・寺崎保広・館野和己・市大樹・馬場基・李成市・渡辺晃宏・藤田高夫・ジョシュア・フライドマン、汲古書院、『東アジア木簡学のために』、2014年、305頁

市大樹、岩波書店、『岩波講座日本歴史2 古代2』2014年、251頁～286頁

関尾史郎、汲古書院、『東アジアの資料学と情報伝達』、2013年、109頁～132頁

市大樹、大修館書店、『古代日本と古代朝鮮の文字文化』、2013年、30頁～51頁

李成市、岩波書店、『岩波講座日本歴史2 古代2』2014年、209頁～250頁

李成市、大修館書店、『古代日本と古代

朝鮮の文字文化』、2013年、2頁～28頁
市大樹、中央公論社、『飛鳥の木簡 - 古代史の新たな解明 - 』、2012年、303頁
李成市、成均館大学出版部、『地下の論語、紙上の論語』、2012年、143頁～165頁

李成市、吉川弘文館、『日本古代の王権と東アジア』、2012年、253頁～271頁

藤田高夫、中国書籍出版社、『東亜文化的伝承と揚棄』、2011年、3頁～11頁
舘野和己、岩波書店、『木簡から古代がみえる』、2010年、39頁～60頁

李成市、岩波書店、『木簡から古代がみえる』、2010年、3頁～19頁

富谷至、昭和堂、『漢字の中国文化』、2009年、43頁～75頁

渡辺晃宏、臨川書店、『漢字文化三千年』、2009年、91頁～112頁

李成市、臨川書店、『漢字文化三千年』、2009年、113頁～131頁

富谷至、名古屋大学出版会、『文書行政の漢帝国』、2010年、494頁

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

角谷 常子 (SUMIYA, Tsuneko)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：00280032

(2) 研究分担者

富谷 至 (TOMIYA, Itaru)

京都大学・人文学研究所・教授

研究者番号：70127108

藤田 高夫 (FUJITA, Takao)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：90298836

關尾 史郎 (SEKIO, Shiro)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：70179331

鷹取 祐司 (TAKATORI, Yuji)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60434700

寺崎 保広 (TERASAKI, Yasuhiro)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：70163912

舘野 和己 (TATENO, Kazumi)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：70171725

渡辺 晃宏 (WATANABE, Akihiro)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財

研究所・都城発掘調査部<平城地区>・室長
研究者番号：30212319

李 成市 (LEE, Sungsi)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：30242374

(3) 連携研究者

市 大樹 (ICHI, Hiroki)

大阪大学大学院・文学研究科・准教授

研究者番号：00343004

馬場 基 (BABA, Hajime)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財
研究所・都城発掘調査部史料室・主任研究員

研究者番号：70332195